

二〇二二年度

和歌山信愛中学校

入学試験 A日程（午前）

国語（六〇分 一〇〇点）

受験上の注意

- 一 この問題冊子は1ページから25ページまであります。
開始のチャイムが鳴ったら、確認して始めなさい。
- 二 受験番号は、問題冊子と解答用紙の両方に書きなさい。
- 三 解答は、すべて解答用紙に書きなさい。
- 四 終了のチャイムが鳴ったら、問題冊子の上に、解答用紙を開いたまま裏返して置きなさい。

受験番号

（解答は、句読点や記号も一字分と数えて記入すること。）

【二】 次の問いに答えなさい。

問一 ――― 線部①～④の漢字の読みをひらがなで答えなさい。また、――― 線部⑤～⑧のひらがなを漢字に直しなさい。

- | | |
|--------------------------|------------------------------|
| ① ボランティア団体を組織する。 | ② 近くの山を探索する。 |
| ③ 父が営む会社を見学する。 | ④ この薬はとてもよく効く。 |
| ⑤ 人間の <u>そせん</u> はサルである。 | ⑥ 人工 <u>えいせい</u> が打ち上げられた。 |
| ⑦ 学級会で <u>いあん</u> した意見。 | ⑧ 県大会の一回戦で <u>やぶ</u> れてしまった。 |

問二 次の①～④の四字熟語には一字誤りがあります。その一字をぬき出し、正しい漢字を答えなさい。

- | | | | |
|--------|--------|--------|--------|
| ① 異句同音 | ② 自業自特 | ③ 電工石火 | ④ 短刀直入 |
|--------|--------|--------|--------|

問三 次の表は、東京に行ったことがある、中学校の同じクラスの友人たちに、どの観光スポットに行ったことがあるかを質問し、その結果をまとめたものです。これを見て、後の問いに答えなさい。

〈表〉 行ったことがある東京の観光スポット

友人の名前	東京スカイツリー	お台場	浅草寺	上野動物園
A	○	○	○	○
B	○	○	○	×
C	○	○	○	×
D	○	○	×	×
E	○	×	○	×
F	○	×	×	○
G	×	○	×	×
H	×	×	×	×

○：その観光スポットに行ったことがある。
 ×：その観光スポットに行ったことがない。

(1) 次の①～④について、表から読み取れる事実として正しいければ○、正しくなければ×と答えなさい。

- ① 東京スカイツリーに行ったことがある人より、お台場に行ったことがある人の方が多い。
- ② 上野動物園に行ったことがある人は、全員東京スカイツリーにも行ったことがある。
- ③ 浅草寺せんそうじに行ったことがない人は、上野動物園にも行ったことがない。
- ④ 東京スカイツリーに行ったことがある人は、東京で少なくとも二つの観光スポットに行ったことがある。

(2) この表をもとに言えることとして正しいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 上野動物園に人気がないのは、全国的に動物園の人气が下がってきているからである。
- イ 中学生は、東京の観光スポットの中で東京スカイツリーが一番好きである。
- ウ 四つの観光スポットすべてに行ったことがない人は、東京に行ったことがない。
- エ 友人たちは、四つすべての観光スポットに行った人から、まったく行かなかった人までさまざまだ。

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

南アメリカ大陸のエクアドルという国で、森を守ろうとしている人々を応援する活動に参加したぼくと仲間たちは、その森に住むミツユビ・ナマケモノという動物に出会った。それは、どこか違う星から来たかのような不思議なムードを漂わせていた。ふさふさとした毛、長い手足、その先に突き出している三本の長い爪。百八十度回る小さな頭、眠そうな目、そしてカタツムリみたいなスローな動き。よく見れば、その顔にはいつもかすかなほえみが浮かんでいる。

行く先々の町でナマケモノを見かけた。①それは哀れな姿だった。その地域では、すごい勢いで森の木が切られて、その後には油を採るためのヤシの農場が作られていくのだった。他の森へと移住できる鳥や動物もいるだろうが、ほとんどの森の生き物は行き場を失う。ナマケモノもそうだった。森の木を切る仕事をしている人々の中に、ナマケモノを見つけてきては、町に持ってきて食肉用に売ろうとする者が現れる。

ぼくたちは町で見かけるナマケモノを買っては、森にまた逃がそうとしたが、買えば買うほど、買い手があるということになって、かえってナマケモノを見つけてきて売ろうとする者が増えてしまうのだった。

②結局、ぼくたちはこの動物が虐待を受けないようにするためには、森を守ることだ、と考えるしかなかった。そして、地元で森を守るために活動している人たちを応援して、「ナマケモノの住む森を守ろう」というスローガンを掲げるようになった。

一方、すっかりナマケモノのファンになってしまったぼくは、このすてきな動物について自分なりの調査に取り掛かることにした。アメリカの生物学者たちのナマケモノについてのすぐれた研究のことを聞き、その研究の舞台だったパナマのスマソニアン熱帯研究所に出かけていった。また、世界でたった一つのナマケモノ救護センターがあると聞いて、コスタリカのカリブ海沿岸にあるアヴィアリオス自然保護区を訪ねた。そしてぼくは、一九九九年の夏、アンニャ・ライトをはじめとする仲間たちと「ナマケモノ倶楽部」というグループを作った。ただし、ぼくたちのナマケモノ倶楽部は動物保護団体ではない。最初のうち、かわいそうな

ナマケモノを守りたい、と思っていたのは事実だけれど、いつの間にかぼくたちは、「ナマケモノのようにになりたい」と思い始めていた。

ミツユビ・ナマケモノは中南米の熱帯の森に生きる哺乳動物だ。アメリカ大陸に移住してきたヨーロッパ人たちは、その動きが遅いというだけでこの動物をバカにして「ナマケモノ」という名前を押しつけた。そしていつも、「のろま」「ぐず」「低能」などと呼んでは、この動物を笑いものにしてきたらしい。

A、この三十年ほどの間の生物学者の調べで、実はナマケモノがなかなかすごい動物であることがわかってきた。

B、ナマケモノの動きがのろいのは筋肉が少ないからで、それはなるべくエネルギーを使わないで、葉っぱだけを食べて生きていくための知恵だということがわかった。また、筋肉が少なければそれだけ体重が軽くなるから、高い木の上のほうの細い枝にもぶら下がることができ、それだけ敵から襲われる心配も少ない。

C おもしろいことに、ナマケモノは七、八日に一度、危険を承知でゆっくりと木の根元まで下りてきて、地面にお尻で浅い穴を掘って糞をする。地面に降りてきて、もし天敵に見つかれば、こんなに動きの遅い動物はすぐ捕まって食べられてしまうだろうに。どうしてこんな危険なことをするのだろう。ある生物学者の研究によると、それはナマケモノが、自分に食べ物をくれる木の根元に糞をすることで、もらった栄養をなるべくその同じ木に返そうとしているのだという。

D、自分を育て

てくれる木を、逆に支え、育てているというわけだ。「環境にやさしい循環型の暮らし」とはまさにこういうものだろう。どうやら、^③ナマケモノは怠けているのでも、バカなのでもないらしい。

「弱肉強食」という言葉がある。それはぼくたち人間が、野生の動物たちの住む世界について抱いてきたイメージで、弱いものが強いものの餌として食べられてしまう、という意味だ。このイメージは単純すぎて、実際の動物界のありようとはずいぶん異なっている。でも、ぼくたち人間は単純な話に目がない。世界が本当に強いもの勝ち、大きいもの勝ち、速いもの勝ちだとしたら、やっぱりぼくたちは勝つほうに魅力を感じるだろう。強くて、大きくて、速い動物たちほどカッコいい。だからライオンは「百獣

の王」などと呼ばれる。同じ哺乳類のナマケモノは人間たちに人気がない。

こうした動物界の「弱肉強食」のイメージは、ぼくたちが生きている人間社会のことを考えるときにもよく使われる。大人たちは、たとえば「この弱肉強食の世の中では、弱虫では生きていけないぞ」と、子供たちを叱る。そしてとくに経済の世界では、現に「より速く、より大きく、より強く」を合言葉に、激しい競争を繰り広げている。

ぼくは競争がいけない、と言いたいのではない。「競争しかない」と思い込んでしまうのが嫌なのだ。④ 人生というものを、弱肉強食という単純なイメージで捉えようとすることが危険だと言いたいのだ。

動物界にだって、ナマケモノみたいな動物がいて、ジャングルの木の高みで、のんびりとした暮らしを立てているじゃないか。強さ、大きさ、速さを競うことなく、毒を持つこともなく、するどい牙を持つこともなく、徹底した低エネルギー、循環型、助け合いのライフスタイルを実現している。こんなナマケモノの生き方がわかればわかるほど、ぼくたちは「ナマケモノを救え」などと考えていた自分がちよつと恥ずかしくなっていた。逆にナマケモノのような生き方こそがぼくたち人間を救ってくれるのではないか、という気さえしてきた。二十一世紀を生き延びるために、人類が何より必要としているのは「ナマケモノになる」ことではないのか、と。

ぼくは、たくさんのナマケモノたちと暮らしてきたジュディ・アローヨさんにきいた。ぼくたち人間がナマケモノから学べることってなんだろう、と。彼女はこう答えた。

「彼らは争わない。必要以上のものを求めないから、誰とでも仲よくできるのね。ひと言で言うところ、Xということかしら、ナマケモノから学ぶべきことは。」

そういえばコスタリカという国は、日本と並んで、「もう戦争をしない」という平和を希求する誓いを立てた珍しい国だということ。ぼくは思い出した。それを言うと、ジュディさんは、うんうん、とうなずいて、こうつけ加えた。

「ブラジルの先住民はナマケモノを『空を支える生き物』と呼んでいる。木の枝にぶら下がっている彼らの姿を見ると、私にも、

空が落ちてこないように押さえてくれているように思えるの。」

⑤ たくさんのナマケモノたちが、今日も中南米の森で空を支えてくれている。

(辻 信一 『ゆっくり』『でいいんだよ』より)

問一 ——— 線部① 「それ」の指す内容を二十字以内で答えなさい。

問二 ——— 線部② 「結局、ぼくたちはこの動物が虐待を受けないようにするためには、森を守ることだ、と考えるしかなかった」とありますが、これについて次の問いに答えなさい。

(1) この考えに至るまでは、筆者はどのようにすることで「この動物」を守ろうとしていたのですか。本文中の言葉を使って三十字以内で答えなさい。

(2) なぜ、(1)のやり方では、うまくいかなかったのですか。本文中の言葉を使って五十字以内で答えなさい。

問三

A

く

D

に当てはまる言葉として適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア さらに イ ところで ウ でも エ まず オ つまり

問四

——線部③「ナマケモノは怠けているのでも、バカなのでもないらしい」とありますが、筆者がそう考える根拠きよとしているものとして、**適当でないもの**を次から二つ選んで記号で答えなさい。

ア ナマケモノは、木の根元に糞をすることで、もらった栄養をなるべくその木に返そうとして、危険を承知で木の根元まで下りてくる。

イ ナマケモノの動きがのろいのは、そうすることなるべくエネルギーを使わないで、葉っぱだけを食べて生きていくための知恵である。

ウ ナマケモノは、動きがのろいものの、弱肉強食の動物界で生き残るために、時として三本の長い爪を使って敵を攻撃こうげきすることもある。

エ ナマケモノは、筋肉が少ないため体重が軽くなり、それによって高い木の上の細い枝にもぶら下がることができ、敵から襲襲われにくい。

オ ナマケモノは、不思議なムードを漂もよほわせており、動きはのろいが、どのような状況きょうきょうに置かれても、その顔にいつもかすかなほえみを浮かべている。

問五

——線部④「人生というものを、弱肉強食という単純なイメージで捉えようとするのが危険だ」とありますが、それはどのような点が危険だというのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 人間と動物の世界は根本的に異なるものののに、動物界のありようをそのまま持ち込んで人間界の教訓としている点。
イ 人間の世界に弱肉強食という要素はないのに、それが人生における大切なものであるかのように見なし、強要する点。
ウ 人間の世界においては、いかなる競争も許されるべきではないのに、動物界のような競争をすべきであると考えている点。
エ 人間が、弱肉強食というわかりやすいイメージだけを取り上げることによって、それ以外の生き方を排除^{はた}してしまう点。
オ 人間は、知性と理性によって競争を回避^ひしようとしているのに、まるで競争が正しいことであるかのように思わせる点。

問六

本文中の

X

に当てはまる言葉を、本文中から二字でぬき出して答えなさい。

——線部⑤「たくさんの中マケモノたちが、今日も中南米の森で空を支えてくれている」とありますが、このことについて、信子さんと愛子さんが話をしています。

信子さん ナマケモノが「空を支えている」というのは、高い木の枝にぶら下がって、じっとしているナマケモノの姿

から、人々が想像したんだね。ナマケモノはただ木にぶら下がっているだけなのに、中南米の森の空を支えているって、面白い発想だよおもしろね。

愛子さん そうだね。でも、筆者はナマケモノの姿だけから、「空を支えている」という比喩ゆ表現を使ったわけじゃないと思うよ。それに、ナマケモノが中南米の森で支えている空というのは、中南米の森の空だけじゃなくて、世界中の空のことを指してるんじゃないかな。

信子さん 私たちの、この空も？

愛子さん そう。ナマケモノが「空を支えている」というのは、ナマケモノの生き方が、世界を支えるという意味なんだと思うよ。

信子さん そんな深い意味があったんだ。

愛子さん 本文にも「二十一世紀を生き延びるために、人類が何より必要としているのは『ナマケモノになる』ことではないのか」って書いてあったでしょ？

信子さん そうか。つまり、せっかくナマケモノがお手本を見せてくれているんだから、二十一世紀を生きる私たちも、ナマケモノを見習って、【】することが必要だってことを、筆者は最後に言いたかったんだね。

本文と会話文にある~~~~線部「二十一世紀を生き延びるために、人類が何より必要としているのは『ナマケモノになる』ことではないのか」という部分は、筆者の考えを述べたものです。筆者は、「人類」が「ナマケモノ」を見習ってどうする必要があるかと考えていますか。会話文の中にある【 】に入る部分を本文中から三十字でぬき出し、最初と最後の五字を答えなさい。

【三】 次の文章は、阿部曉子の小説『バラ・スター』の一節です。主人公の宝良は高校生で、全国的に有名な硬式テニスの選手です。しかし交通事故で大けがをし、車いすによる生活を強いられます。偶然、車いすテニス競技のすばらしさを知った親友の百花は、病院で宝良に車いすテニスをやろうと声をかけますが、宝良はそれを冷たく拒否します。もう一度宝良と話をしようと決心した百花は、退院した宝良の家を訪れます。これに続く次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「おばさん、こんばんは。たーちゃんは？」

「宝良なら、二階の部屋に……」

百花は紗栄子（宝良の母）が言い終わる前に「おじやまします」と頭を下げて、靴を脱いで玄関から上がりこんだ。廊下を進みながら宝良の自宅がリフォームされていることに気づいた。以前よりも廊下の幅が広くなっている。車いすが楽に通れる幅だ。思い返せば外から玄関までの敷地にもスロープができていたし、車いすの宝良にも二階の自室を利用できるよう、廊下の奥にはエレベーターが設置されていた。百花は知らぬ間に様変わりしていた君島家の様子に驚きながら、階段を上って二階に向かった。

宝良の自室は廊下の突き当たりだが、すぐそばにエレベーターがあり、一階から移動してすぐに部屋で休める仕組みになっていた。部屋の隣には真新しい引き戸式のトイレも設置されている。脊髄を損傷した場合、かなりの割合で患者は排泄の問題を抱えることになる。でもこれならば、宝良も快適に過ごすことができるだろう。

「たーちゃん、百花だよ。ここ開けて、話があるの」

車いすでも開閉しやすいスライド式に取り換えられた①宝良の部屋のドアを百花はノックした。ドアの向こうでかすかに物音が聞こえたが、返事はない。しかし返事がないことは想定のうちだったので百花は動じなかった。

「たーちゃん、開けて」「開けてくれないと騒ぐから」「ノックしながら歌っちゃうから」「十二時間くらいなら余裕でノックしまくるから！」とドアを叩き続けること二分余り、鍵が開けられる音がした。スライド式のドアがすばらしい勢いで開いた。

「いい加減にしてよ！」

震えあがるような眼光でにらみつける宝良は、百花と同じようにジャージにトレーナーを着てパーカーをおつていた。② 百花

は、約一か月ぶりに会う宝良との目線の違いに衝撃を受けた。車いすに乗った相手の顔は、こんなにも低い位置にあるのか。

でも宝良はやはり宝良だった。にらまれると、身がすくむような眼光はそのままだ。その眼光に負けないように百花は腹に力をこめて、ジャージのポケットから出した預金通帳を宝良の鼻先に突きつけた。さすがの宝良もたじろいで、車いすを引いた。

③ 「何これ……」

「私の全財産。たまに使っちゃうこともあったけど、小学一年生からずっとお年玉貯めて四十万円ある。このお金で、たーちゃん、私と一緒に福岡に行つて。福岡の飯塚市。五月十二日の火曜日から十七日の日曜日まで。車いすテニスのジャパンオープン、見に行こう」

宝良は、しばらく何も言葉が出ないという顔で百花を凝視していた。たつぷり十秒は絶句したあと、ようやく口を開いた。

「……ばかなの？」

「たーちゃん、言つたよね。車いすテニスはテニスじゃないって。テニスの妥協で代用品なんだって。でもたーちゃん、車いすテニスの試合、ちゃんと見たことあるの？」

宝良は答えず、唇を引き結んだ。やつぱりそうなのだ。百花は預金通帳を突き出したまま続けた。

「確かに車いすテニスと、テニスは別の競技だよ。私たちがやってきたテニスとは全然違う。だって車いすで走るんだもん。車いすで走りながら球を打つんだもん。それで相手に勝たなきゃいけないんだもん。すごく難しい、高度な競技なんだよ。ねえ、たーちゃん。車いすテニスはやったことあるって言つたよね。やらされた、って。でも、それ、違うから。確かに車いすテニスだったかもしれないけど、たーちゃんがやったことってレベル1くらいのことでしょ。ううん、レベル0・3かも。その程度で車いすテニスを知つた気になつちやつてるの、どうなの？」

内心ガチガチに緊張しながら、百花は挑戦的に口角を吊り上げた。

宝良の目に、ゆらっと炎が燃えるように鋭い光がともった。

そう、この目だ。戦うことに血を湧きたたせる宝良の目だ。

「だから本当的車いすテニス、たーちゃんに見せてあげるよ。飯塚のジャパンオープン、見に行こう。日本どころかアジア最高の大会なんだよ。世界中のすごい選手が集まって戦うんだよ」

「ばかなの？ 福岡って九州じゃない。そんなところに行けるわけない」

「行けるよ。羽田空港から福岡空港まで飛行機で行って、福岡空港から新飯塚まで高速バスで行けば、あとはタクシーでちよちよいのちよいだよ。ちゃんと調べたもんね」

「だから！ モモは行けるよ。自分の足で九州でも沖縄でも北海道でもシベリアでも行けばいい！ でも私はこんだから、九州なんて遠いところ行けるわけない！」

「行きなさい、宝良」

凜とした、と形容するにはやや鋭い声が響いて百花は驚いた。

いつのまにか二階に上がってきた紗栄子は、まっすぐに歩いてきて百花のかたわらに立ち止まると、娘を見つめた。

「宝良。あなた、パソコンで車いすテニスの動画をいくつも見てたわね。三國智司選手のロンドンパラリンピック決勝とか、七條玲選手の全豪オープンとか。本当は関心があるんでしょ？ 違う？」

④ え、と驚いて百花は宝良を見た。宝良は動揺を浮かべたあと、眉を逆立てた。

「どうしてそれ」

「私に知られるのが嫌なら、次から私のパソコンを使って動画見た時には履歴をちゃんと消しておきなさい」

宝良を黙らせた後、紗栄子は百花に目を移した。

「百花ちゃん、本当に宝良を福岡に連れて行ってくれるなら、かかる費用は百花ちゃんの分まですべてこちらで出すわ。お願いできてる？」

「えっ？ いや、そんな……」

「いいのよ、お金ならあるの。宝良の事故の賠償金^{ばいしょう}が」

紗栄子が淡々と発したその言葉に、百花はただ**息をのんだ**。

⑤ 宝良、と紗栄子が静かに呼びかけた。

「あなた、人生がくるってしまっと思ったってでしょ。たしかにそうね。でもあなたにけがをさせて、本当だったら一生かかって手に入れられるかどうかのお金を支払うことになった人も、だいぶ人生がくるってしまっと思ったと思うわよ」

「……だから何？ だからゆるせてこと？」

「そうは言っていない。ただ、あの人はあなたが意識を失っている間に泣きながら土下座して、いろいろ社会的制裁も受けて、あなたにできるだけの償い^{つぐな}もした。それで宝良、あなたは？ これからどうするの？ あんな死んでもおかしくなかった事故を奇跡^{きせき}的に生き延びて、これからも続いていく人生を、あなたはどう生きるの？」

母親に問いかけられて、宝良の瞳^{ひとみ}が小さく揺れた。

「宝良。これからは車いすで生活することになるって説明したとき、あなた言ったわね。『死にたい』って。それは今でも変わっていないの？」

宝良は唇を引き結んだまま答えない。紗栄子が凄^{すこ}みをこめて目を細めた。

「それなら、死ぬのはいつだってできるわ。冥土^{めいど}の土産^{みやげ}にジャパンオープンを見てきなさい。車いすじゃ九州は無理なんてあんたは言っただけど、ばかばかしい。車いすの選手が世界各地から日本に来るんだから、すでに日本にいるあんたが会場まで行けないはずがないでしょう。アジア最高の大会を見て、ここに帰ってきたその時にもまだ死にたいなら、私が母親として責任をもってあん

たに引導を渡すわ」

「お、お、おばさん……」

「そうと決まったら、百花ちゃんの親御さんにもご相談しなくちゃね。今からお邪魔してもいいかしら。宝良、何してるの、さつと準備しなさい」

数分後、百花は自転車を宝良の自宅に置いたまま、紗栄子の運転する車に乗って自宅に戻った。新調したばかりの紗栄子の車は、トランク部分のスロープを下ろして車いすのまま乗りこめる仕様になっており、宝良も百花と並んで座った。ただ、宝良はずっと窓に顔を向けたままで、百花とは一言も口をきこうとしなかった。

「たーちゃん、無理やりごめんね。でも、どうしても私、たーちゃんと本物の車いすテニスの試合を見たい」

「⑥ 試合なら見たよ、モモに車いすテニスしないかって言われた日から何度も。三國智司とか、ベルナル・デュリスとか、ヨハナ・フィンセントとか、七條玲とか」

そう、先ほど紗栄子が話していた。宝良はパソコンで車いすテニスの試合をいくつも見ていた、と。

「……どうだった？」

二秒おいて、すごかった、と返った声は小さな雨粒みたいだった。

「車いすの動きがあんまり速くて、なめらかで、地面を走っているんじゃないって氷の上を滑っているみたいだった。あの人たち、コートにいる間はほぼ停まらないんだよ、8の字みたいに動きながら、ずっと走ってる。(中略)……あんなプレー、私には無理。車いすになってから行きたい場所に行くまでに信じられないくらい時間がかかる。走ろうとしてもすぐ腕が痛くて動かなくなる。車いすを動かすだけで精いっぱいなのに、その上テニスなんてできると思えない。でもテニスを取ったら、自分に何が残るのかわかんない。テニスができない自分が自分って言えるのかもわかんない。わかるのはテニスをしてないと苦しいってことだけ。それ以外は本当にわかんないの。全然なにも……」

声が震えた瞬間、宝良はきつく唇をかみしめた。宝良は人前で涙をこぼすことはおろか、声を震わせることすら自分に許さない。そんな融通がきかなくて頑固で誇り高い宝良が大好きだった。そして、今ここで車いすに座っている宝良も同じだ。素直じゃなくて意地っ張りで、こんな時くらいは弱音を吐いてもいいだろうに、やっぱりそうはできないほど誇り高い。宝良は宝良だ。宝良のままだ。何が起きてても、これからどんな道を選ぶにしても。

「ちよつと、なんでモモが泣いてるの？」

「私もわかんない。ずっとわかんなかった。たーちゃんの役に立ちたいって思っているのに、私に何ができるのかわかんなくて、元気の出ること何か言いたいけど、私は何もわかってなくて変なこと言って傷つけちゃうんじゃないかって思うと怖くて。いまでもわかんない。何もわかんないの。だから、とにかく一緒に行こう。アジアで一番すごい大会見て、やっぱり無理って思ったら、車いすテニス、しなくていいから。それでもたーちゃんはたーちゃんだから。テニスしてたって、しなくて、たーちゃんは私のヒーローだから」

「……モモ、泣くのやめてよ。鼻水垂れてる」

「何かわかるかもしれないし、何もわかんないかもしれないけど、行こう、一緒に」

のちに宝良はこの時の百花の顔を「ぐしやぐしやのびしよびしよ」と形容するのだが、そのぐしやぐしやでびしよびしよの顔にさしもの宝良もおそれをなしたらしく、わかった、行くよ、行くからと幼児の機嫌を取るように言った。⑦ 百花は駄々っ子のよう

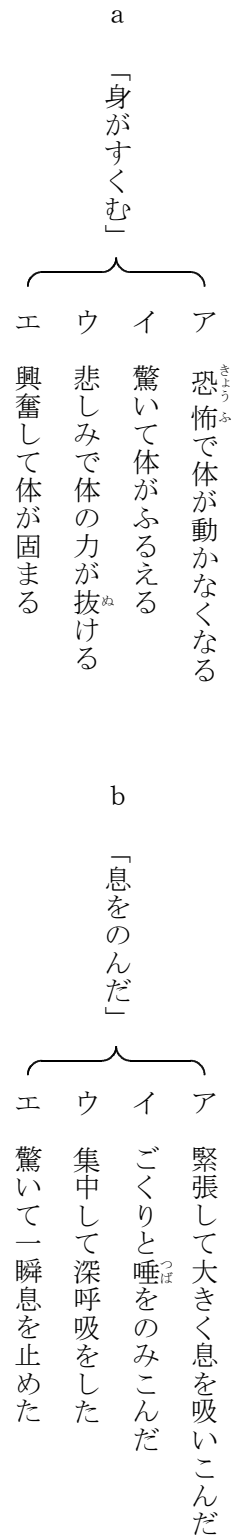
に泣きながら、行こう、行こうね、一緒に、とくり返した。

テニスをしてても、しなくても、自分の足で走っても、車いすで走っても、宝良は宝良だ。宝良が宝良であってくればそれでいい。それだけでいい。

けれど、願わくば、見つけてほしい。

これからの人生を照らす、光を。

問一 〓 線部 a 「身がすくむ」、b 「息をのんだ」の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。



問二 〓 線部① 「宝良の部屋のドアを百花はノックした」とありますが、このときの「百花」について説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 宝良の家に到着し、以前の様子とは違う紗栄子の様子に不審感を抱きながらも、まずは宝良と会って安心したいと考えている。

イ 宝良の家に到着し、以前とは違った形にリフォームされた家の様子に感心しつつ、とにかく宝良に会って説得しようとしている。

ウ 宝良の家に到着し、以前とは様変わりしてしまった家の様子にびっくりしながら、宝良が返事をしてくれるかどうか心配している。

エ 宝良の家に到着し、以前とは変わってしまった新しい家の様子に慌ててしまい、勢いでここまでできてしまったことを後悔している。

している。

オ 宝良の家に到着し、以前とは違う宝良のことを考えた家の様子に驚きながら、久しぶりに宝良に会うことを楽しみにしている。

問三

——線部②「百花は、約一か月ぶりに会う宝良との目線の違いに衝撃を受けた」とありますが、このときの「百花」について説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 車いすに乗った宝良の様子がおかしいことは予想していたが、その憎^{にく}しみの表情を前に彼女に裏切られたという思いを強くしている。

イ 車いすに乗った宝良の視線の位置が全く違うことに気づき、宝良をとりまく状況が大きく変わってしまったことを実感している。

ウ 車いすに乗った宝良の視線が今までと違って下からくることで、かつて強かった宝良が弱くなったような気がしてとまどっている。

エ 車いすに乗った宝良が下からにらみ上げていることに気がつき、以前のやさしい宝良が姿を消してしまったことを残念がっている。

オ 車いすに乗った宝良の目つきが以前とは違いよそよそしくなってしまったことに気づき、友情にひびが入ってしまったと感じている。

問四

——線部③「何これ……」とありますが、このときの「宝良」について説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ドアの前で大声でわめいている百花の様子にむつとしながらも、突然^と会いにきた百花を歓迎^{かんげい}している。
イ 自分の許可を得ないで勝手に部屋に入ってきた百花に腹が立ち、追いつ返そうとにらみつけている。
ウ 突然自分に会いにきた百花のことはうれしく思うが、差し出された預金通帳の金額の大きさに驚いている。
エ 無断で部屋に入り、預金通帳を取り出し一方的にわけのわからないことを言う百花にいらだっている。
オ 部屋に入ってきた百花に無言でいきなり預金通帳を突き付けられ、その意味がわからずとまどっている。

問五

——線部④「え、と驚いて百花は宝良を見た」とありますが、「百花」が「驚い」たのはなぜですか。その理由を説明した次の文の（Ⅰ）（Ⅱ）に入る言葉を考えて答えなさい。

（Ⅰ）のに（Ⅱ）ことを知ったから。

問六

——線部⑤「宝良、と紗栄子が静かに呼びかけた」とありますが、このときの「紗栄子」について説明したものと最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 交通事故にあい、強い被害者意識の中で自分の力で生きることが投げ出さなくなっている娘の気持ちに理解は示しながらも、甘え^{あま}をすて、これからの自分の人生を自分の力で生きていくことの大切さを厳しく説こうとしている。

イ 交通事故の加害者に人生をくるわされたと思い、この先の人生に希望を見出^{みいだ}せなくなっている宝良の気持ちを理解し、寄り添^そうようにふるまいつつも、本心では娘を許すことができず、厳しくつきはなそうとしている。

ウ 自分のパソコンを娘が勝手に使ってしまったことに対して強い怒^{いか}りの気持ちを表しながらも、交通事故で身も心も傷ついてやけになっている娘の気持ちを理解して、娘が前向きな気持ちになれるように応援しようとしている。

エ 母親として娘を傷つけた交通事故の相手を絶対に許せないという気持ちを抱えながらも、けがをして落ち込んでいる娘に対してあえて厳しく接することで、自分の人生自体を前向きなものにしていこうと心を奮い立たせている。

オ 娘のことを思う百花のやさしい気持ちをまのあたりにし、それに対して駄^だ々^だをこね、一方的に甘えている自分の娘のことがふがいなく感じられてしまい腹が立ち、必要以上に自分の娘に厳しく当たってしまったっている。

問七

——線部⑥「試合なら見たよ、モモに車いすテニスしないかって言われた日から何度も。三國智司とか、ベルナル・デユリスとか、ヨハンナ・フィンセントとか、七條玲とか」とありますが、このときの「宝良」について説明したものとしても最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 百花や母親に一方的に説得されたことに不満を持ち、百花と一言も話そうとしなかったが、仕方なく車いすテニスをやってみようと考えている。

イ 事故にあう前から車いすテニスへの思いを持ち続けていたことを百花や母親に指摘され、素直に車いすテニスにチャレンジしてみようと思っている。

ウ 百花や母親の半ば強引ともいえる言動の中に自分への強い思いを感じ、隠していた車いすテニスへの思いを打ち明けようとしている。

エ 本当は気乗りしないが、百花や母親が自分に対して厳しくも温かい気持ちを向けてくれたので、福岡に行くことを断りづらくなっている。

オ 百花や母親と激しい口論をし、二人を傷つけてしまったことに気づき、今までの自分のわがままな態度をふりかえり、深く反省している。

問八

——線部⑦「百花は駄々っ子のように泣きながら、行こう、行こうね、一緒に、とくり返した」とありますが、このときの「百花」について説明したものとして適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 今までテニスも上手で華のある宝良に一方的に尽くしていた百花だったが、交通事故をきっかけに逆に宝良が自分に気を遣ってくれることになり、うれしくてたまらなくなっている。

イ 何をするのが宝良にとって一番よいのかはまだわからないけれども、とにかくやれることを全部やったうえで宝良にとって最善の道をとればいいと前向きに考えている。

ウ 宝良に車いすテニスをすすめることに成功し、それが宝良にとって必ず役に立つことだと確信できたので、今までの緊張がすっかりとけて、子供のように泣きじゃくっている。

エ これまでずっとプライドが高く気難しい宝良の前で、彼女のために何ができるかを始終気にして顔色をうかがっていたが、その気遣いが報われた形になってほっとしている。

オ 大好きな宝良と九州の車いすテニス大会に一緒に行けることが楽しみで仕方がなく、これから向かう九州の旅先でのことを考えたら、わくわくして涙が止まらなくなってしまうている。

カ 交通事故で大けがをし、今までと大きく状況が変わってしまった宝良のことを心配していたが、自分に厳しく、誇り高い宝良はそのままだとわかり、安心している。

問九 次の会話は、この文章を読んだ四人が読後の感想を話し合ったものです。会話文中の【 A 】【 B 】に当てはまるものとして最も適当なものを後から選び、それぞれ記号で答えなさい。

和子さん このシーンは百花と宝良の熱い友情が描かれているシーンだね。百花は交通事故で大けがをした宝良と一生

懸命話し合おうとしているよ。

歌子さん 預金通帳を持って宝良の部屋に乗りこんでいくところなど、彼女の覚悟がよく表れているね。

信子さん しかし、母親の紗栄子さんも立派だね。交通事故にあった自分の娘に対してなかなかこうは言えないものだよ。また、善は急いで、思ったことをすぐ行動に移すところなどもてきぱきしていて、読んでいてすがすがしいよ。

愛子さん 宝良は周りの人にめぐまれているよ。私、このシーンの百花が大好きだな。

和子さん 私も大好き。百花はやっぱり【 A 】にこだわっている。そして、それが一番の宝良の幸せだと思っている。これって究極の愛情じゃないのかな。

歌子さん そうだね。そのうえでもう一つ、これからの人生を照らす光を、と言っているね。これは、百花が宝良に

【 B 】を見つけてほしいと思っっているってことだよ。

愛子さん なるほど。最後に倒置表現を使って印象的に描くことで、百花の思いが強調されているよ。宝良が幸せになるためにはこの二つが必要ってことだね。今後どうなるのかな。楽しみだな。

【 A

ア 宝良がいつも強い人であること

イ 宝良が大好きなテニスをする事

ウ 宝良の一番近くにゐること

エ 宝良が宝良らしく生きること

オ 宝良の求めることに応えること

【 B

ア 今後の人生を支えてくれる生きがい

イ 自分の才能を周囲に示せる競技

ウ 楽しく笑わせてくれる友人

エ 人生を豊かに過ごせる経済力

オ 人生を支え合うことができる恋人

【問題はこれで終わりです。】

--

$$\left[\begin{array}{c} \text{---} \\ \text{---} \\ \text{---} \end{array} \right]$$

問
一

⑤	①
⑥	②
⑦	③ む
⑧ れて	④ く

問二

①	↓
②	↓
③	↓
④	↓

問
三

(1)

①
②
③
④

(2)

--

【一】

[illegible]

問
二

[illegible]

(2)

[illegible]

問
三

A
B
C
D

問
四

[illegible]

問
七

§

【三】

問
一

a
b

問
二

問三

問四

問五

II	I
----	---

問六

	問七	
	問八	

問
九

A
B

【一】

問一	
⑤ 祖先	① そしき
⑥ 衛星	② たんさく
⑦ 提案	③ いとなむ
⑧ 敗れて	④ きく

問二
① 句 ↓ 口
② 特 ↓ 得
③ 工 ↓ 光
④ 短 ↓ 単

問三
(1)
① ×
② ○
③ ×
④ ○
(2)
エ

【二】

問一
行
く
先
々
の
町
で
ぼ
く
が
見
か
け
た
ナ
マ
ケ
モ
ノ

問二	
(1)	
、	町
ま	で
た	売
森	ら
に	れ
逃	て
が	い
す	る
こ	ナ
と	マ
。	ケ
	モ
	ノ
	を
	買
	い
	取
	っ
	て

(2)		
が	で	買
増	、	え
え	か	ば
て	え	買
し	っ	う
ま	て	ほ
っ	ナ	ど
た	マ	、
か	ケ	買
ら	モ	い
。	ノ	手
	を	が
	売	あ
	ろ	る
	う	と
	と	い
	す	う
	る	こ
	者	と

問三
A
ウ
B
エ
C
ア
D
オ

問四
ウ
オ
問五
エ
問六
平
和

問七
徹
底
し
た
低
ゝ
イ
ル
を
実
現

【三】

問一
a
ア
b
エ

問二
イ
問三
イ
問四
オ

問五	
I	宝良は車いすテニスに興味がないと思っていた
II	車いすテニスの動画を見るほど関心があった

問六
ア
問七
ウ
問八
イ
カ

問九
A
エ
B
ア

二〇二二年度

和歌山信愛中学校

入学試験 B日程

国語 (六〇分 一〇〇点)

受験上の注意

- 一 この問題冊子は1ページから24ページまであります。
開始のチャイムが鳴ったら、確認して始めなさい。
- 二 受験番号は、問題冊子と解答用紙の両方に書きなさい。
- 三 解答は、すべて解答用紙に書きなさい。
- 四 終了のチャイムが鳴ったら、問題冊子の上に、解答用紙を開いたまま裏返して置きなさい。
〈解答は、句読点や記号も一字分と数えて記入すること。〉

受験番号

--

【一】 次の問いに答えなさい。

問一 次の①～④の――線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。また、⑤～⑩の――線部のひらがなを漢字に直しなさい。

- ① 台風の余波。
- ② 直ちに救助する。
- ③ 仲裁に入る。
- ④ 穴場をさがす。
- ⑤ その値にはごさがある。
- ⑥ ルールにしたがう。
- ⑦ 準備たいそうをする。
- ⑧ きようそう心に火がつく。
- ⑨ 新商品をせんでんする。
- ⑩ こうしゅう衛生に関する問題。

問二 次の①～⑤の――線部と同じ働きものをそれぞれ後のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

① 準備はいいかと聞かれた。

- ア コーヒーが紅茶を下さい。
イ 試合は来週の日曜ですか。
ウ だれかにお願ひします。
エ こんなひどいことがあるものか。

② 工場から新商品が運ばれる。

- ア 人に笑われることをしない。
イ あの日のごことが思い出される。
ウ 朝礼で校長先生が話される。
エ この車は七人まで乗れる。

③ 行列に並んだ。

- ア 新しく買った自転車だよ。
イ 散る花はまるで雪のようだ。
ウ 冬なのに外は暖かだ。
エ 鳥がいつせいに飛んだ。

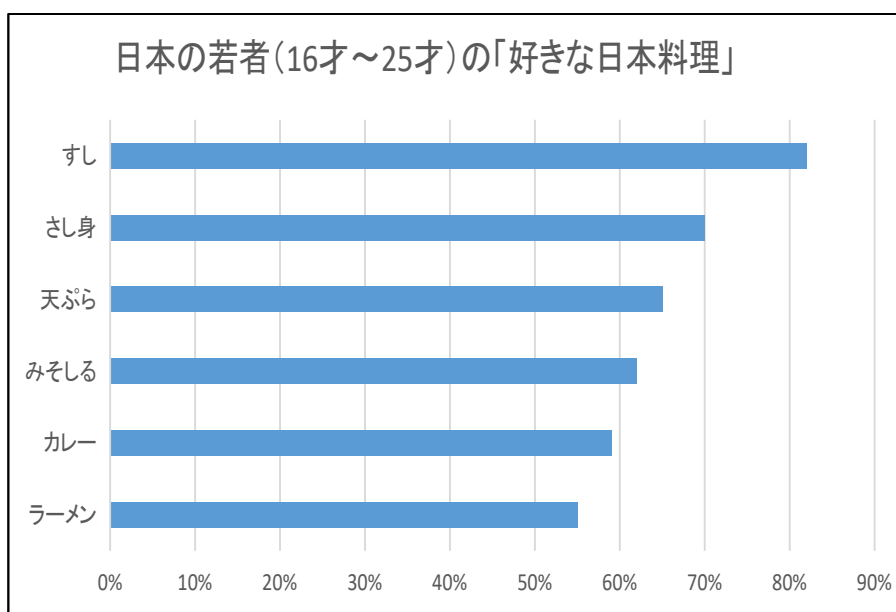
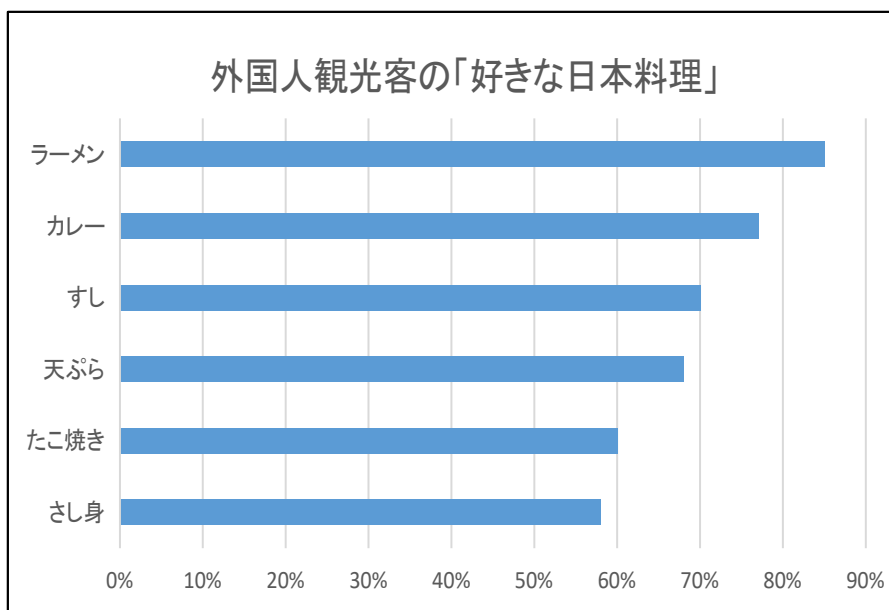
④ そんなこと私は知らない。

- ア 英語で手紙は書けない。
イ おやつはもうないよ。
ウ 困っている人は少くない。
エ さりげない思いやりが大切だ。

⑤ ご飯を食べる元氣さえ残っていない。

ア このお守りさえあれば、がんばれる。
イ どきどきして返事さえできなかった。
ウ 風が強く、雨さえ降り始めた。
エ 頭さえ打たなければ、だいじようぶ。

問三 クラスで日本の食文化について調べることになりました。和子さんの班では、「好きな日本料理」について尋ねた調査結果の上位六品目のグラフを見ながら話し合っています。後の(1)、(2)の問いに答えなさい。



(1) 次のア～ウの内容について、グラフから読み取れる事実として正しければ○、正しくなければ×と答えなさい。

ア 日本の若者では、「天ぷら」を好きだという人より「みそしる」を好きだという人の方が少ない。

イ 「すし」が好きな人の割合は、外国人観光客より日本の若者の方が多い。

ウ 外国人観光客に「とんかつ」が好きな人はいない。

(2) 次の会話文の（①）～（④）に当てはまる料理名を、グラフから探して書きなさい。

和子：「世界で最も有名な日本の料理はすしだと思っていたけれど、この調査によると外国人観光客に一番人気があるのは、（①）なんだね。」

信子：「（②）は毎日の日本の食卓では欠かせないように思うけれど、外国人観光客の回答にはあがっていないね。」

愛子：「日本の若者のほうには出てこないけれど、（③）の人気の高いのは、外国人観光客に人気の関西の名物だからかな。」

和子：「どちらのグラフにもラーメンや天ぷらや（④）は日本料理として挙げられているけれど、もともとは外国から来た料理のはずだよね。」

信子：「日本の若者からも外国人観光客からも、日本の料理として好まれていることがわかるね。」

愛子：「こうして見ると、日本では、外国から受け入れた料理が日本風にアレンジされて、すっかり根づいていることがわかるね。」

$$\gg \mathbf{I} \ll$$

本当に

代だって前の時代より何かしら進歩している。その人たちの理屈だと、人間はずっと退化しているということになってしまう。たとえ理想の時代が弥生時代^{やよい}だったとしても、「農耕技術によつて縄文時代^{じようもん}より人間が退化した。」と言つて言えないことはない。

その理屈で言えば、何より水洗便所の技術自体が人間の退化の究極だろう。逆にそれに比べれば②自動的に流れる便所かどうか見極め^{ききわ}ないといけないという現状の方が「自然」に近い良い時代という屁理屈も立てられる。

自然の中に暮らす人にとっては、似たように見えても毒がある蛇^{へび}かない蛇か、見分けることが「生きる力」。ならば、似たような便器でも自然に流れる便器か流れない便器か見極めなければいけなくなった現状は、むしろ環境に対する注意を人間により多く求める意味で退化を防ぐのではないか、というわけだ。

ここで人に求められているのは、「自動で流れる便器は、ここにセンサーがついていて、それが人間を感知して……。」という、人間が作った「人工の自然」に対する理解だ。その理解は「毒のある蛇は毒袋^{どくふくろ}があるので、頭の形が三角になっている。」というような「自然な自然」に対する理解と質的には同じだ。さらに大枠^{わく}はそれでよくても、ヤマカガシなど頭が三角でない毒蛇もいるように、シャワー便座だけを本体に増設したタイプではセンサーはあっても自動で水が流れない、などといった、より正確な理解はあればあるほどいい。

たとえコンピュータの細かい原理がわからないとしても「自動で動く以上、人間の動きをどうにかしてこの便器は理解しているはずで、そのためにはどこかに人を感じするセンサーがあるはず。」とか「便座と本体は独立しているので、便座のセンサーの情報は本体には伝わらない。」というような大きな原理での理解は可能だ。

それは結局は物事の段取りを考える力であり、普段の生活でも求められる基本的な人間の力である。「どうしてそういうことができるのか。」というその大きな原理に興味も持たず、無関心でいるのはよくない。大きな原理がわかれば、技術にどういう限界があるのかもわかってくる。そういうものが、③真の科学技術教養^{まのかがくぎゆう}だろう。自然に生きる人々が、蛇に殺されないための知恵^えを身につけたのと同じように、「人工の自然」の中で生きる力も、やはり身につけねばならない。

トイレの例から入ったが、実はあらゆる分野で似たような話がある。情報通信技術の進歩により手で触れられない、実感で学べない「人工の自然」が私たちの周りに広がっている。今までの知識としての科学技術教養とは違って、新しい時代においては、この社会を支えている原理を身につけること、すなわち、科学技術による「人工の自然」を生きるための科学技術教養が必要なのだ。過去の文化を伝えることは重要だ。人間の本質はいつの時代も変わらないというのも事実だろう。しかし、科学技術に繰り返してはならない。過去の教訓を学ぶだけでは対応できない新しい「自然」の中で、私たちは生きなければならないのだ。科学技術に支えられた世の中で生きていく上で重要なことを、今こそ皆が真剣に考えなければならない時にきているのではないだろうか。

（坂村 健『不完全な時代』より）

《Ⅱ》

今日の人々の生活は、多量な情報とともに、さまざまな情報機器の開発によってより便利なものになってきているが、何か根本的なものが欠け始めているように思われる。ここでは、それについて考えてみよう。

かつて情報機器の発達は人々の間に、より一層のコミュニケーションを促すものとして語られていた。そして現在、機器は確かにわたしたちに見知らぬ世界の人々と、いつでもどこでも会話できるといふ便利さを与えてくれている。

A、その一方で若者たちの間に、毎日顔を合わせている友人との間でも、機器を通じてしか会話ができないといった現象が現れている。彼らは、まるで直接的なコミュニケーションの稚拙さから生まれる衝突を避けるために、必要な小道具として機器を利用しているように見えるが、それがかえって心のすれ違いを生むこともある。

B、最近話題になっているテレビ

会議においては、人々が顔を合わせて行う通常の会議と違って、発信者が、聞く側の顔をたしかめるとかうなずくという反応をとらえることができず、きわめて事務的なものになると言われている。このように、機器を介在させると、そういった場の雰囲気は十分に伝えられないという欠点が生じて、人間としての微妙なふれあいの場を失わせることになる。

④ このことはきわめて重要なことである。

C

、人間社会は元来、互いの表情を見ながら直接行うコミュニケーションによつて心の交流が生まれ、人と人との結びつきによつて成り立ってきたものだからである。ところが、今日の機器への過度の依存

とその利用は、このコミュニケーションによる直接的交流を失わせ、互いの信頼を深め情報の循環を円滑にするという働きを消失させる方向に働いているように見える。

確かに、機器は人と会うための時間とわずらわしさを減らしてくれるものではあるが、人と人との意思伝達に機械的手段が介在すると、人間をより孤立させ、人間相互の関係を次第に無機質化していく危険を膨らませているのである。そしてその意味で機器の※ハイテク化は、現代人の心の寂しさを増す一因となっているのである。それゆえ、こうした社会と機器環境の中で、わたしたちは、真に豊かで文化的な生活とは何であるかを真剣に考える必要がある。

人間の文化は、人と人とのコミュニケーションから生み出されたものである。たとえ、どのように優れた情報機器が開発され、人々がそれらを使つていても、人間の社会は人間のスキンプの上に形成されていくものであり、それに根ざしたものにしか真の人間生活は生まれてこないことを意識し続ける必要があるのである。

（小山田 了三『情報史・情報学』より）

注 ※ ハイテク化：「ハイテク」は「ハイテクノロジー」の略で、次の時代の社会に影響を及ぼすような高度な技術が生まれるようになること。

問一 本文中の X に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア のらりくらり イ いたれりつくせり ウ 持ちつ持たれつ エ 踏^ふんだり蹴^けったり

問二 ——— 線部①「そういうこと」とは、どういうことですか。本文中の言葉を使って、三十字以内で答えなさい。

問三 ——— 線部②「自動的に流れる便所かどうか見極めないといけないという現状の方が『自然』に近い」とありますが、筆者はどのような点で『自然』に近い」と言っているのですか。「ゝ点。」に続く形で、本文中から二十字以内でぬき出して答えなさい。

問四 ——— 線部③「真の科学技術教養」とは、どのようなものですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 人間が作った「人工の自然」が「自然な自然」を手本としながらどのように発展してきたかを知ること、科学技術が将来どのような問題に直面していくかを予見する力。

イ 人間が作った「人工の自然」が人類を退化させてきたということを認め、「自然な自然」を生活の中に積極的に取り入れることで、真に豊かな人間生活を創造する力。

ウ 人間が作った「人工の自然」がどのような仕組みで動いているのかに興味を持ち、その仕組みが便利さと引き換^かえに、環

境にどのような負荷^{ふか}を与えるのかを考察する力。

エ 人間が作った「人工の自然」がどのような仕組みで動いているのかを正しく学び、その仕組みをさらに改良すること、私たちの生活をより便利にする技術を発明する力。

オ 人間が作った「人工の自然」がどのような仕組みで動いているのかに関心を持ち、その仕組みの大枠を理解することで、何ができて何ができないのかを把握^{はあく}する力。

問五 本文中の A → C に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ただし、同じものを二度選んではいけません。

ア つまり イ なぜならば ウ ところが エ また

問六 ——— 線部④「このこと」が指す内容として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 聞く側の反応をたしかめながら話すことが大切であること。

イ 機器を使ったテレビ会議が近ごろ盛ん^{さか}に行われていること。

ウ 機器の発達が明らかに人々の生活をとっても便利にしたこと。

エ 若者が機器を使った会話に依存する現象が見られること。

オ 機器の使用が人々のふれあう機会を失わせる傾向^{けい}があること。

《Ⅰ》・《Ⅱ》の文章を読んで、授業で話し合いました。次の会話文を読んで、後の(1)、(2)の問いに答えなさい。

先生：《Ⅱ》で言われる「情報機器」はどんなものを指しているのでしょうか。

信子：スマートフォンやパソコンのことでしょうか。

先生：そうですね。こうしたハイテク機器でインターネットを利用することで、① 十六字が減りま

した。遠く離れた人々といつでもどこでも会話することができるようになりました。

愛子：とても便利ですね。

先生：でもこうした利便さは、新たな危険を生んでいると《Ⅱ》の筆者は言っていますね。それについては、
どうですか。

信子：人間を孤立させ、人間関係を無機質化していくと言っているよ。

愛子：その結果、② 九字が増していると言っているね。

先生：《Ⅰ》・《Ⅱ》の文章を比較すると、③。では、私たちはこうしたハイテク機器と、

どのように付き合っていかなければならないのでしょうか。

信子：便利だからといってスマートフォンやパソコンに頼りすぎるのは良くないね。

愛子：互いに顔を合わせてやりとりする直接的なコミュニケーションを大切にすることを忘れてはいけないよ。

先生：そうですね。信子さんと愛子さんの、そうした気づきが《Ⅰ》の筆者が言う真の科学技術教養を身につけて「人工の自然」の中で生きていく力になるのです。

(1) ① 十六字、② 九字 に当てはまる言葉をそれぞれ指示された字数で《Ⅱ》からぬき出しなさい。

(2) ③ に当てはまる内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 科学技術の進歩に対して《Ⅰ》の筆者は疑問を抱^{いだ}いていますね。《Ⅱ》の筆者は肯定^{こう}的な立場をとっているけれども、《Ⅰ》も《Ⅱ》もかつて人間がしてきた仕事をテクノロジーが取ってかわるだろうという前提で論を展開しているね。
- イ 科学技術の進歩に対して《Ⅰ》の筆者は疑問を抱いていますね。《Ⅱ》の筆者は肯定的な立場をとっていて、《Ⅰ》と《Ⅱ》は人間が今後科学技術によって真に豊かな生活を手に入れられるかどうかという点でまったく意見が対立しているね。
- ウ 科学技術の進歩に対して《Ⅰ》の筆者は肯定的です。《Ⅱ》の筆者は疑問を抱いているけれども、《Ⅰ》も《Ⅱ》も人間の本質を理解した上で科学技術と付き合うために重要なことは何かを考えなければならないと言っているね。
- エ 科学技術の進歩に対して《Ⅰ》の筆者は肯定的です。《Ⅱ》の筆者は疑問を抱いているけれども、《Ⅰ》も《Ⅱ》も人間の本質は変わらないから、科学技術に頼らない人間らしい生き方を今こそ貫^{つらぬ}き通さなければならないと言っているね。
- オ 科学技術の進歩に対して《Ⅰ》の筆者は肯定的ですね。《Ⅱ》の筆者は疑問を抱いていて、《Ⅰ》と《Ⅱ》は進歩し続ける科学技術に人間がうまく順応することができかどうかという点でまったく意見が対立しているね。

【三】 江崎^{えざき}学と松本憲太は、北海道の生田^{いくた}羽村にある中学校の分校の一年生です。九月、予定されていた「夜空を見る会」が天候の急変により中止になり、二人は学校で親の迎え^{むか}を待っていました。が、いつの間にか「学」の姿が見えなくなっていました。ます。雷^{かみなり}の音が鳴り続ける中、「憲太」は図書室で進学塾^{じゆく}のテキストを開いている。「学」を見つけました。これに続く次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

学がべそをかく顔なんて、いつぶりに見ただろう？ 見たとしたらたぶん、小学校に上がる前だ。学と聞いて憲太が頭に浮^うかべる彼の表情^かは、最近では暗記カードや教科書などをにらみつけるようにしているものと、真面目^{まじめ}で整っていて、いかにも頭脳明晰^{せき}そうにまっすぐ前を見つめる横顔、それから、こちらをふり向いて心底うれしげに笑う顔——それらだ。

いやそれよりも、なぜ、涙^{なみだ}ぐんでいるんだろう。

「おい……おまえ」

① ……憲太は、両親もおじいさんもおばあさんも、ずっとこの村じゃないか。でも僕は違^{ちが}う。親が勝手に……田舎^{いなか}に変な夢抱^{いだ}いで、こんな村に来て」

村おこしの一環^{かん}として、十数年前に農地を無償^{しやう}で貸し出すと都会から若夫婦^{わうふう}を誘致^{ゆうち}したのは、憲太の祖父の策だった。

「うちの親がそのまま都会にいてくれたら、僕の今はきっと違^{ちが}ってた。こんな村じゃ、十分な勉強なんてできない。ネットの授業配信も、もう少し先だというし。札幌^{さつぽろ}や大きな街の子は、なんの苦労もなく進学塾や予備校に通っている」

泣きべその理由を推^おしはかりながら、憲太は学をとりあえず励^{はげ}ましてみた。

「でもおまえ、今でも十分すごいじゃん」

「どこがだよ！」

② 大声を出した学の頬^ほを伝い、細いあごの先からしずくが落ちる。

「成績は下がったんだよ、僕は僕なりにやったつもりだったのに……僕より上のやつらは、みんな都会の子だった。彼らと同じことをやれたら、絶対負けなかったのに」

学は顎^{あご}を手の甲^{こう}でぬぐいながら、進学塾のテキストを拾い上げた。

「環境が違うんだ、勉強する環境が……こんな田舎にいるって、それだけですごいハンデだ。このままなら、きっとこれからもどんどん成績は下がる。成績が下があれば、望む高校に行けないかもしれない、大学にだって」

そして、苦しげにしぼり出すような声で、こう断じた。

「生田羽村が、僕の未来を閉ざすんだ」

ああそうか——憲太は腑^ふに落ちた——こいつは悔^くしいんだ。悔しくて泣いているんだ。自分ではどうにもならないことが自分を邪魔^{じやま}していると信じこんで。

眼鏡を外してひじをつき、両手で顔を覆^{おほ}って、学はどうとう嗚咽^{おえつ}しだした。憲太は暗さにまぎれてしまいそうな彼のつむじを、しばらくにらんだ。

「……めそめそしやがって」

口から出た声は、憲太自身もおどろくほどに低かった。

「おまえの未来って、なんだよ」

その低さで、内にくすぶる怒^{いか}りを憲太は自覚した。学も異変^{いへん}を悟^{さと}ったのか顔を上げた。

「どんな未来が望^{もち}みなんだよ、言ってみろよ、おい」

そういえば、学の将来の夢を憲太は知らないのだった。憲太も教えていなかった。というか、真面目に考えたことがなかった。学の未来については、村人の大人たちが口々に好き勝手なことを語るのを耳にするだけだった。

「……医師」

学も低い声で一言答えた。

「は？ イシ？」

「医師。お医者さんだよ。久松先生みたいな」

子どものころから世話になっている、穏やかで優しく、おじいさん先生の像が、憲太の頭の中で結ばれた。

A 雷が連続して落ちた。学の喉が、ひゅつと鳴った。

なるほど、医者なら難しいだろう。難しくなければ困る。人の命を預かる仕事なのだから。でも。

「俺、^③今のおまえみたいなお医者さんなら、診てほしくない。ほんとマジ、絶対やだね」

B 雷が落ちたみたいにな、学の体がびくつとなつた。憲太は ^a たたみかけた。

「だって今のおまえなら、手術失敗しても、器具が悪かったとか、とにかく上手くいかなかったら周りのせいにしそうじゃん」

「なんだった？」

学が眉を^{まゆ}つり上げて席を立ち、上目^{づか}遣いでにらみつけてきたが、^④ 憲太は動じなかった。

「おまえ、さっき言ったこと忘れたのかよ？ 自分の成績が落ちたのを生田羽村のせいにしてた。こんな田舎だからダメなんだってさ」

右手が勝手に動いて、向かい合う学の肩^{かた}をつかんでいた。

「バツカじゃねえの？ 久松先生だってこの村の出身だぞ。そりゃたしかにここは田舎だよ。でも、それだけの理由でおまえがダメになるなら、おまえはその程度だったただだよ。全世界のお医者さんは一人残らず都会出身なのかよ？ 違うだろ？ ^⑤ 本^{ほん}当^{とう}に

すごいやつは、どこにいたってちゃんとやれる」

「でも」

C 学が反論しかけた矢先、落雷^{らくらい}があつた。手の中にある彼の肩が ^b こわばるのがわかった。憲太はまた窓の外を見てしまった。

空が明るくなることに、一面を覆う雷雲の形が、黒と群青と紫を混ぜたような色で浮かび上がる。

「でも……僕のことをすごいと言ったのは、僕じゃない。大人たちや、憲太だよ」

憲太の手首が、そっと学の右手で押しつけられた。冷たい手だった。

「大人にはなんと噂されてもよかったけど、憲太が言ってくれたのはうれしかった。だから」

ずっと、誰よりすぐくあり続けなくてはいけないと思った。——学は打ちひしがれたみたいにうなだれた。

「あ……僕、憲太のせいにしたね」

学はもう泣き声をたてなかった。⑥ただ、両手で顔をぬぐい続けた。雷が夜を走るたびに、唇をかみしめ、目の下や頬に指や

手の甲を押し当てる青白い顔が見えた。

憲太はだんだんと不思議な気分になった。学はクラスの中でははっきりと大人っぽい部類に入る。本校の生徒を含めてもそうだし、実際に目にしたわけではないけど、札幌の進学塾のクラスでだって、群を抜いて冷静で落ち着き払った雰囲気だっただろう。けれども今、自分の前にいる学は、まるで子どもだった。雷におびえて目を閉じ、耳をふさいでいた、遠い日のように。

そうか、うれしかったのか。俺の言葉が。

D もう何度目かわからない稲光と轟音が襲う。雷が光るたびに、幼かったころの学が今の学と重なり、さっきまでの腹立ちは

どこへやら、憲太は自分でもわけのわからぬまま、笑っていた。

「俺さ、おまえのことすごいって言ったけどさ、別におまえが勉強すごいやつだから友達なんじゃないよ」

学の手が止まる。憲太は続けた。

「俺は学が神童だから好きなんじゃない。おまえがブサイクでも頭悪くても、おまえがおまえならそれでいいんだ」

「憲太……」

「テストの成績がすごいと思ったのは嘘じゃないよ。学がほめられるのもすげえうれしい。でも、⑦俺、おまえの本当にすごいと

「ころは、別にあるのを知ってる」

「え？」

「春休みさ、おまえいなかっただろ？ だから俺、※ビートの間引き作業、一人で手伝わされたんだよな」
稲妻いなづまについて言葉を切り、窓の外へと目をやった憲太を、学が遠慮りよがちに急せかした。

「……間引き作業がどうかしたの？」

「ああ、それな。あのさあ、間引き作業ってすげえ面倒めんどうくさくってつまんねえの。おまえ、知ってた？」

「まあ、地味で遅々ちぢぢとして進まない作業っていうよね。うちの親は好きじゃないって言ってた」

「だろ？ おまえは？」

「僕は別に好きでも嫌いでもない」

「俺もそうだった。でも俺さ、今年初めて、うわ、この作業つまんねえって気づいたんだよ。それまでは間引き作業を嫌いじゃないと思ってた。うんざりなんてしなかったからさ。でも、本当は嫌いだったみたいなんだ」

学はうなずいた。

「それで？」

「でさ、なんで今まで毎年やってきて気づかなかったのかなって考えてみてさ、俺わかったんだよ」

憲太は学の胸元むなを人差し指で軽く押した。

「去年まで、おまえといっしょにやっていたからだって」

虚きよをつかれたような学の表情が、E稲光に照らされる。その光の力を借りて、憲太は学の目をのぞきこむ。

「そうだよ、隣となりにおまえが、学がいたから、『嫌い』や『つまんねえ』がごまかされていたんだ。おまえといっしょにやったから、あの間引き作業もそれなりに楽しかったんだ」

ただでさえ停電中のうえ、裸^{はだか}眼の学は視界がうまくとらえにくいのか、目をこらすようにじっと憲太を見返してくる。

「僕も、嫌いだと思ったことはない……」

「来年おまえ、一人でやってみろよ。びっくりするほど時間たたねえから。あ、来年もおまえ札幌に行くのか？」
学は特になにも答えなかった。構わなかった。憲太は心の内をそのまま言葉にした。

「とにかく俺、思ったんだ。友達ってすげえんだなあ、って」

嫌いだったりつまらない時間も、いっしょにいさえすれば、乗り切れる。

楽しみすら、見いだせるかもしれない。

そういう力を持つ、自分にとってたったひとりの相手。

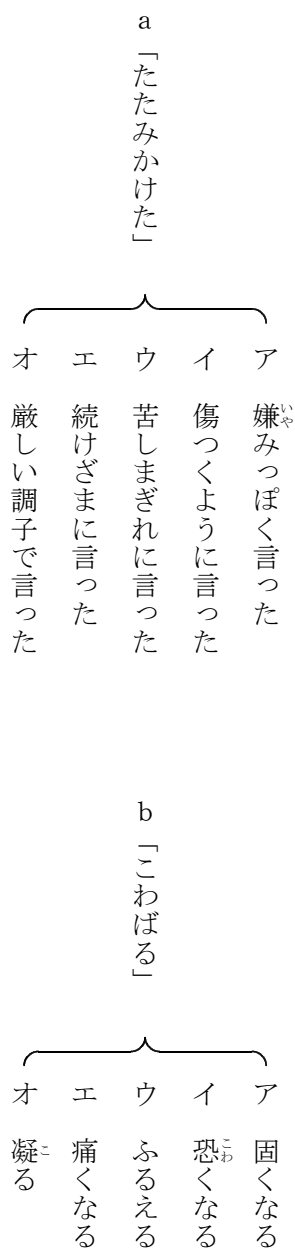
「おまえが本当にすごいのは、そういうところだよ」

学は静かに顔をふせた。

（乾^{いぬい} ルカ『願いながら、祈^{いの}りながら』より）

注 ※ ビート：砂糖大根。寒い地方で作られ、根の液から砂糖をとる。

問一 〓 線部 a、b の言葉の本文中での意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。



問二 〓 線部 ① 「……憲太は、両親もおじいさんもおばあさんも、ずっとこの村じゃないか。でも僕は違う。親が勝手に……田舎に変な夢抱いて、こんな村に来て」とありますが、この時の「学」の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 憲太が田舎の町で頭脳明晰^{せき}だと思われていることに対する嫉妬^{しつと}。
- イ 自分が田舎に来て、他の子より勉強ができることに対する優越感^{えつ}。
- ウ 自分の意思とは違うところで、自分のことを決められたことに対する不満。
- エ 田舎に引っ越^こして来たが、うまく生活できないことに対する劣等感^{れつ}。
- オ 勉強ばかりする自分を冷ややかに見る憲太の視線に対する反発。

問三

——線部②「大声を出した学の頬を伝い、細いあごの先からしずくが落ちる」とありますが、「学」が泣く理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 取り乱してしまった自分を憲太に見られたことが恥ずかしかったから。

イ 田舎に引越さず都会にいたら、もっと勉強ができたはずだと悔しく思ったから。

ウ 現実から目を背け、言いわけばかりしている自分自身が情けなかったから。

エ 成績が下がったことを憲太に指摘されて、少し馬鹿にされたように感じたから。

オ 自分よりずっと成績の悪い憲太に励まされたことが腹立たしかったから。

問四

——線部③「今のおまえみたいなの」とありますが、これは「学」のどのような点について言ったものですか。本文中の言葉を使って二十五字以内で答えなさい。

問五 ——— 線部④「憲太は動じなかった」とありますが、その理由を説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記

号で答えなさい。

- ア すぐに泣く学とケンカをしても勝てるという確信があったから。
- イ 自分の言ったことに間違いはないと強い自信を持っていたから。
- ウ 自分の発言に対して気持ちが揺らぐのは良くないと思ったから。
- エ 医師になるのは難しいので、学にはとても無理だと思ったから。
- オ 学のような意気地のない人のことを認めてはいなかったから。

問六 ——— 線部⑤「本当にすごいやつは、どこにいたってちゃんとやれる」とありますが、これに最も近い意味を持つことわざ

を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 河童かわづむの川流れ
- イ 猫ねこに小判
- ウ 月とすっぽん
- エ 弘法こうぼうは筆を選ばず
- オ 石の上にも三年

問七 ——— 線部⑥「ただ、両手で顔をぬぐい続けた。雷が夜を走るたびに、唇をかみしめ、目の下や頬に指や手の甲を押し当て

る青白い顔が見えた」とありますが、この時の「学」の気持ちを説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 田舎と都会では学習環境に大きな違いがあることをわかってくれない憲太に対して反発し、嫌悪^{けんお}する気持ち。

イ 憲太の言うことに反論したものの、結局は憲太の言うように責任転嫁^かした自分に対する情けなく悔しい気持ち。

ウ 大人にも憲太にも認められていたことを話すことにより、自分の言うことが正しいのだと強く主張したい気持ち。

エ 憲太のせいにして、現実の勉強から逃げ^にたいと思っていた自分を反省し、これからは改善しようと思う気持ち。

オ もう中学生だというのに、雷をこわがって友達の前で泣いてしまったふがない自分を恥ずかしく思う気持ち。

問八 ——— 線部⑦「俺、おまえの本当にすごいところは、別にあるのを知ってる」とありますが、「憲太」は「学」のすごいと

ころを、どういうところに見いだしていますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア どんな状況^{きょうきょう}でも決して憲太との友情を忘れずにいられるところ。

イ 医者になる夢を実現するために、とてもよく勉強しているところ。

ウ ビートの間引き作業という面倒^{めんど}な作業も根気よく続けられるところ。

エ いっしょにいる時間を楽しいものと感じさせてくれるところ。

オ 雷の稲光や轟音^{おとせ}の中でも恐れずに一人で教室でいられるところ。

問九 この文章の「雷」や「稲光」の効果の説明したものとして**適当でないもの**を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ~~~~~線部Aの「雷」は、学が夢を打ち明けた場面で、学の張りつめた気持ち^{おも}ちが表れている。
- イ ~~~~~線部Bの「雷」は実際の雷ではないが、雷を使うことで学のショックをよく表している。
- ウ ~~~~~線部Cの「雷」は、憲太に反論したくても反論できない学の気の小ささをよく表している。
- エ ~~~~~線部Dの「稲光」は、目の前にいる学と幼かったころの学とをつなげる効果がある。
- オ ~~~~~線部Eの「稲光」は、憲太に思いがけないことを言われた学の驚き^{おどろ}をよく表している。

【問題はこれで終わります。】

受験番号

--

⑧	⑤	①
⑨	⑥	② ち に
⑩	⑦	③
		④

①
②
③
④
⑤

問三 (1)	ア
	イ
	ウ

①
②
③
④

【二一】

問一

[illegible][illegible]

問四	
問五	A
	B
	C
問六	

[illegible]

②

(2)

問	【三三】
一	
a	
b	

問二 問三

[illegible]

問五

問七

問八

問九

問七

受験番号

【一】

①	よは	②	ただちに	③	ちゅうさい	④	あなば
⑤	誤差	⑥	従う	⑦	体操		
⑧	競争	⑨	宣伝	⑩	公衆		

問二

①	イ	②	ア	③	エ	④	ア	⑤	イ
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

問三

(1)	ア ○	イ ○	ウ ×
-----	--------	--------	--------

(2)

①	ラーメン	②	みそしる	③	たこ焼き	④	カレー
---	------	---	------	---	------	---	-----

【二】

問一
イ

問二

技	術	進	歩	で	人	間	が	怠	け	者	に	なり	り	、	さ	ら	に	は
退	化	す	る	と	い	う	こ	と	。									

問三

環	境	に	対	す	る	注	意	を	人	間	に	よ	り	多	く	求	め	る	
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--

点。

問四

オ

問五

A	ウ	B	エ	C	イ
---	---	---	---	---	---

問六

オ

問七(1)

①	人	と	会	う	た	め	の	時	間	と	わ	ず	ら	わ	し	さ
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

②

現	代	人	の	心	の	寂	し	さ
---	---	---	---	---	---	---	---	---

(2)

ウ

【三】

問一

a	エ	b	ア
---	---	---	---

問二

ウ

問三

イ

問四

自	分	の	上	手	く	い	か	な	い	こ	と	を	周	り	の	せ	い	に	し
そ	う	な	点	。															

問五

イ

問六

エ

問七

イ

問八

エ

問九

ウ

二〇二二年度

和歌山信愛中学校

入学試験 A日程（午後）

作文（五〇分）

受験上の注意

- 一 問題用紙の他に、解答用紙、下書き用紙があります。
開始のチャイムが鳴ったら、確認して始めなさい。
- 二 受験番号は、すべての用紙に書きなさい。
- 三 解答は、すべて解答用紙に書きなさい。
- 四 終了のチャイムが鳴ったら、問題冊子の上に、解答用紙と
下書き用紙を開いたまま裏返して置きなさい。

受験番号

--

問 次の文章を読んで、あなたの感じたことや考えたことを六百字以内で述べなさい。

私は、子ども時代に人間をもっとも成長させるのは「成功体験」だと思っています。

何かを成し遂げたときの達成感や、人から認められたときの嬉しいという感情が次のがんばりを生み出すのです。

ですから、人間関係でも成功体験を積み上げていくことが大切です。「人から嫌われないようにしよう」というネガティブな生き方をしていたら、決して成功体験は得られないでしょう。

人から嫌われないということは、「人の反感を買わないように気をつける」「自分の考えを出さない」など、自分を偽って生きるということにつながるのです。

そのように自分自身を押し殺して生きていると、自分の人生を思い切って生きることできません。何より楽しくないでしょう。

また、「くしないようにしよう」というネガティブな目標では、失敗をすることを恐れてしまい、前向きな気持ちになりにくいものです。

それよりも、人から好かれるように自分の行動を切り替えていくと、もう少し、前向きに考えられるのではないでしょうか。

人に「嫌われない」ことではなく、人に「好かれる」ことを考えてみるのです。

具体的には、「自分の取り柄や長所を磨く」「自分から声をかける」「人を笑わせることや喜ばせることをする」などで

つまり本音で話せる友だちをつくるために、周りに合わせて無難に過ごすのではなく、自分から動いてみるということです。

嫌われないためにいろいろなものを我慢するより、好かれるためにいろいろなことをやってみる。それが自分の長所や取り柄を伸ばし、結果的にはあなたの個性をつくっていくのです。

さらに言えば、誰かから「好かれる」だけでなく、誰かを「好きになる」ことも考えてみましょう。たくさん友だちを得ようとして自分の本心を隠しているより、「この人は面白いな」「あの人は素敵だな」という人を見つけて仲良くなることを考えたほうが、ずっと楽しいはずです。

人に嫌われないことよりも、他の人から好かれることや他の人を好きになることを考えてみる。

そのほうが、より前向きな気持ちで暮らせるのではないのでしょうか。

二〇二二年度

和歌山信愛中学校

入学試験 C日程

作文 (五〇分)

受験上の注意

- 一 問題用紙の他に、解答用紙、下書き用紙があります。
開始のチャイムが鳴ったら、確認して始めなさい。
- 二 受験番号は、すべての用紙に書きなさい。
- 三 解答は、すべて解答用紙に書きなさい。
- 四 終了のチャイムが鳴ったら、問題冊子の上に、解答用紙と
下書き用紙を開いたまま裏返して置きなさい。

受験番号

--

問 次の文章は、ある小学生が書いた作文である。これを読んで「謝る^{あやま}」ということについて、あなたが感じたことや考えたことを六百字以内で述べなさい。

「ひどいことを言ってしまった……」分かっているけど、「ごめんなさい」の一言が心の中のとげとげに引っかかって出てこない。

私と父は仲が良い、はずだった。父は私の好きなアイドルグループのことをよく知っていて、彼ら^{かれ}が音楽番組に出演する時には必ず録画してくれている。父自身もスポーツやドラマなどのテレビが好きで、毎日番組表を欠かさずチェックして録画している。夜になって父が帰宅するとよく、

「今日〇〇が出てるから予約録画してあるよ」

と教えてくれるので、私はそれを見て、アイドルグループの情報を手に入れていた。当然、そのグループのことにも詳^{くわ}しくなり、同じグループを好きな子と話をしても、私の方がよく知っていて気分が良かった。

ところが、昨日のことだった。

「昨日のテレビ見た？ すごくかっこよかったけど、あんなことになるって残念だね」

と、りんちゃんが言ってきた。「えっ、何？」そう思ったけど、何か悔^{くや}しくて聞けなかった。そこから後の授業は、ほとんど頭に残っていない。ずっと、大好きなグループに何があったんだろうとそればかり考えていた。でも、なぜか悔しくて誰^{だれ}にも聞けなかった。

家に帰るとすぐに、母にスマホを借りて調べてみた。すると、〇〇が音楽番組に出演し、私の大好きな△△くんが脱退^{だつ}することになったとネットニュースに書かれていた。

夜になって父が帰ってきた。

「なんで昨日録画しなかったの！ △△くんが脱退するって、最後のテレビ出演だったのに。お父さんのバカ！」

一度口に出したら止まらなくなって、どんどんひどいことを言ってしまった。最初は、何のことか分からなかった父も察したらしく、

「ごめんな」

と言ったきり何も言わなかった。私はその場にしばらくたって、自分の部屋に飛び込^こんだ。

朝、気まずい気分でリビングに下りた。父はもう会社に行ってしまったらしい。ほっとしてテーブルに着くと、メモが置いてあるのに気付いた。「大事なテレビ番組を録画しなくてごめん。あれから、△△くんの最後の出演の動画がないか探したら、事務所のホームページに動画があることが分かったよ」父の字でそう書いてあった。

別に私は父に録画してほしいと頼^{たの}んでいたわけじゃない。父がやさしさからいつも録画してくれていただけで、本当は人任せにしていた私が悪いのに……。今日父が帰ってきたら、まっさきに「ごめんなさい」って謝ろう。